

高尾山報

令和7年2月号

南無飯縄大権現
大本堂前
御祈願所



大本堂前に善男善女が祈りを捧げる



書院 松の間にて記念撮影する佐藤貫首と内局の皆様

総本山智積院 内局御一行 年賀に来山 一月十七日(金)

真言宗智山派総本山智積院より、三神栄法宗務総長をはじめとし、久保田剛士総務部長、金子隆昭教学部長、正田精栄法務部長、杉本栄次財務部長、宮田隆伸宗務出張所長の皆さまが来山されました。御一行は、到着後大書院で法楽をお勤めされ、山内僧侶・職員の出迎えを受け、佐藤貫首と当山書院・松の間にて新年のご挨拶を交わされ、しばし歓談の後に下山されました。

波より池の薄氷 解ればもとの水とこそなれ
春風が池の薄氷の上を吹きわたる。揺れ動くさざ波によって氷が解けたなら、氷も本来の水へと戻っていくよ。
春を告げる風を「東風」と呼びます。お大師さまは、上の句で東方からの暖かな風と池上の冷たい氷とを対比し、下の句では固体の氷と液体の水との類似を説かれています。
この歌の前には「煩惱即菩提の心」という詞書(説明)が記されています。「煩惱即菩提」とは、「煩惱(心)を苦しめるもの」と「菩提(煩惱を断ち切った悟りの境地)」という二語を、「即(そのまま)」という語でつないだ熟語になりました。「煩惱あれば菩提あり」「煩惱は菩提の種」という言い回しもありますが、「煩惱即菩提」は

おそらく、お大師さまの歌に見える「氷」は煩惱、「水」は菩提を表しているのではないのでしょうか。凝り固まった悩み事を一気に「溶かす」のではなく、「氷解」という言葉のように、日々の積み重ねによって徐々に「解け」ていく生活が求められているような気がします。
さて先月号では、東京上野に伝わるお大師さまの伝承を見ましたが、今回は上野から北に向かった隅田川・荒川を渡った先にある「西新井」(足立区西新井)を取り上げてみましょう。この地には、通称「西新井大師」として知られる五智山遍照院總持寺(真言宗豊山派)という寺院があります。小説家、田山花袋(一八七二〜一九三〇)の『東京近郊一日の行楽』にも「関東の高野山」として登場する西新井大師は、神奈川県川崎大師平間寺と並び称される厄

除大師の霊場として多くの参詣者を迎えてきました。お大師さま自刻と伝える弘法大師像(秘仏)が安置されているなど、その名の通り、お大師さまと結び付きの深いお寺です。
西新井大師の草創については、例えば昭和初期に刊行された『弘法大師御霊験記』に、次のように語られています。
弘仁十一年(八二〇)のこと。お大師さまは東国修行の途中で、武蔵国足立の里に立ち寄られました。日が暮れて、たまたまこの郷の總持寺の松の根元で休まれていると、旅の疲れからかいつの間にか眠られてしまいました。するとその時、松の上には總持寺の御本尊である十一面観音菩薩が姿を現し、「今この郷には疫病が流行している。そなたの姿を刻んで身替わりとし、悪災消除の護摩を焚いて、速やかに諸人の難を取り除くように」と告げると、そのまま姿を消されたのでした。
これが五智山遍照院總持寺に伝わる身替大師であり、俗に言う西新井大師なのです。
『弘法大師御霊験記』伝承によって多少の違いはありますが、観音菩薩のお告げによって、自らの像を刻まれたことを物語る話の一つです。この他にも、江戸時代後期の地誌『江戸名所図会』には、お大師さまが加持をした霊水の功德や、その側にあつたことから「西新井」と名付けられたとする地名の由来も見えるなど、さまざまな書物に語り継がれています。
江戸時代には、日光・奥州街道千住宿周辺の名所として賑わいを見せた西新井大師。お大師さまの数々の霊験は、お寺から四方に延びる「大師道」を行き来した多くの参詣者によっても、全国四方八方へと伝えられていったのでしょう。(栃木北部教区普濟寺)

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城 (152)

この冬は、東北の日本海側を中心として警報級の大雪に見舞われ、降りの雪かき、身も心も疲れ果てたという方も多くいらつしやるでしょう。本格的な春を迎えたとはいえ、季節外れの雪や急な雪解けなど、まだまだ心配事もありかと思えます。どうぞ、お身体お大事に、ご無理をなされませんようお願いいたします。

鶯の

涙のつらら

うち解けて

古巣ながらや

春を知るらむ

『新古今集』 惟明親王
(鶯が流した涙の氷も立春になつて解けてきたけれど、谷の奥の古巣に籠ったままで、はたして春の到来を知っているだ

ろうかか) 鶯も涙を流すのでしょか。こぼれ落ちる涙が凍ったものを「涙の氷」と言いますが、この歌では、冬の凍てつく辛さに耐え忍ぶ姿を「涙のつらら」と表現しています。少しづつ気温も上昇してきて、「涙の氷柱」もポタポタと「打ち解けて」きたのでしょか。じつとしていた鶯も、興味深げに春の長閑な風景を眺めているかもしれない。やがて外の世界への緊張も「打ち解け」たなら、いよいよ古巣から外界へと飛び出して、元気が鳴き声を春の里山に響かせてくれるのでしょか。
弘法大師空海(七七四〜八三五)もまた、春景色を和歌に託しています。
春風に

「煩惱がそのまま悟りの縁となる」ことを指し示す仏教語となります。そう言われても、「煩惱」と「菩提」は対立したものに映るかも知れません。江戸時代の諺に、菩提は水に澄める月、手に取る水に取られず、煩惱は家の犬、打てど門を去らぬ(悟りは水に映る月のように、目には見えても手に入れることはできない。

「煩惱がそのまま悟りの縁となる」ことを指し示す仏教語となります。そう言われても、「煩惱」と「菩提」は対立したものに映るかも知れません。江戸時代の諺に、菩提は水に澄める月、手に取る水に取られず、煩惱は家の犬、打てど門を去らぬ(悟りは水に映る月のように、目には見えても手に入れることはできない。

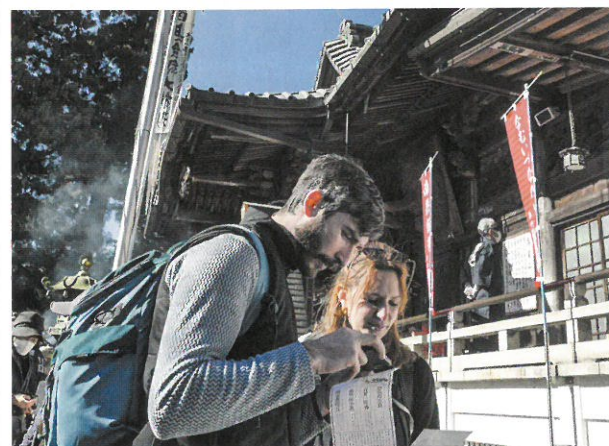


春になり鶯が里山に鳴き声を響かせる

煩惱は人に付きまとう飼犬のように、追い払っても我が身に添って離れない)と見えるように、悟り(幸せ)を完全に自分のものとするのは難しく、煩惱(悩み)もまた完全に自分から切り離すのは難しいものです。そのような見方からすれば、煩惱も菩提も別のものではなく同じもの(二体)と捉えることができるで



山中^{がしゅう}迺晶さんによる奉納舞



この大吉とは良い意味だよ



御信徒の諸願成就を祈念する佐藤貫首



大本堂にて御信徒の皆様が諸願成就を願ひ御本尊様に祈りを捧げる



二年参りに訪れた大勢の参拝者

希望に満ちた新年への一步を踏み出す

新春に祈る 高尾山初詣

令和七年 乙巳(きのとみ)



彼方より昇る初日の出を祝う迎光祭では、大勢の方と御来光を拝した



御本尊様へ繋がる御手綱を手に取り祈る

令和七年乙巳を迎えた大本堂では、二年参りに訪れた大勢の御信徒の皆様をお迎えて佐藤貫首導師のもと、世界平和・国土安穩・家内安全・身体健全・身上安全・心願成就、その他御信徒皆様の諸願成就を祈り、新春特別開帳大護摩供が厳修されました。
本年は俊源大徳による中興開山六五十年という節目の年に正当します。高尾山には、全国各地の人々が御参詣に訪れ、大

本堂に設けられた御本尊様へと繋がる御手綱を手に取って拝み、御縁を深められました。
元日の明け方には境内地広庭に祈禱所を設け、初日の出を祝う「迎光祭」が執り行われました。大勢の参拝者と共に地平線より昇る御来光を拝し、一年の平穩無事をお祈りすることができました。
御信徒皆様にとって、令和七年がより一層のご繁栄とご健勝をもたらすよう御祈念申し上げます。

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

62

十九世秀観1 秀観の山主就任

紀伊徳川家祈禱所であった一八世紀の後半、高尾山は一七世秀興が権僧正に任ぜられるなど盛期を迎えた。一八世秀神の晋山から間もなく、紀州家との関係は一旦途切れるものの、八王子宿の商都としての発展目覚ましく、高尾山信仰には追い風が吹きつづけた。

秀神代回顧

文政元年（二八一八）十一月二日、病の床にあつた高尾山一八世秀神が示寂。その在任は足かけ三八年の長きにわたつた。その間には、浅間山の噴火（天明三年・一七八三）や、世に言う天明の飢饉が発生、荒廃からの復興を目指して老中松平定信が寛政改革を推

進した。折からの民間経済の活性と軌を一にして人々の消費行動は活発化し、やがて文芸、芸術、芸能活動の爛熟期である化政文化の時代を迎えることになる。

秀神は景気の上向きを察したか、寛政三年（二七九二）に湯島出開帳を執行。同一二年には飯縄大権現の偽葉が出回る事件が起きるなど、江戸に高尾山信仰の確かな基盤を築いた。同八年着手の唐銅五重塔再建に関連して言及した、幕府による街中へ什宝を引き出しての勸進禁止や大造りの新規什物の規制は、庶民による寺社への信仰活動から発するあふれるばかりの熱気を反映している。この五重塔一件に関

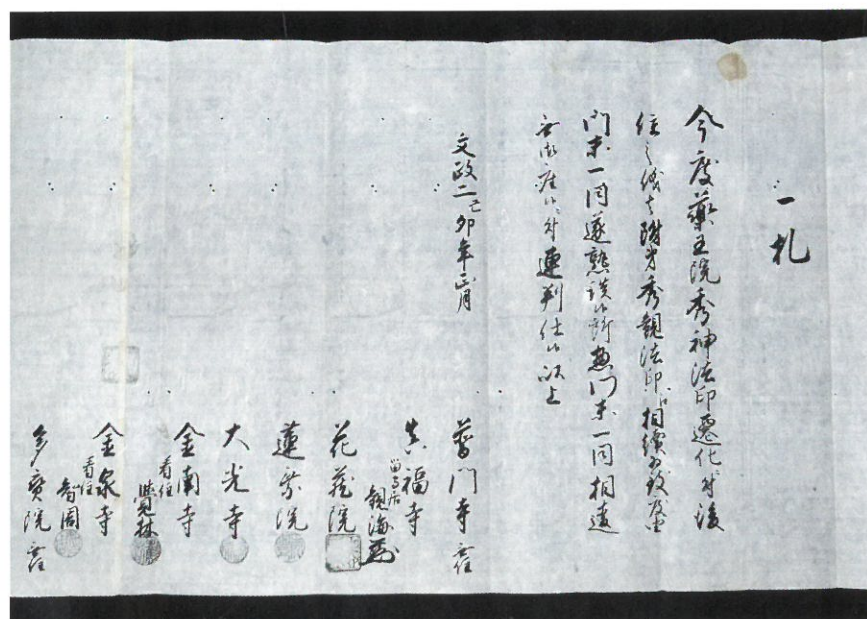
わつては寺社奉行松平康定と良好な関係を結び、寛政九年には紀州家祈禱所を復興、同年から文化二年（一八〇五）にかけては、本堂建立や飯縄権現社の修築など山内整備を推進した。関東西部から甲斐（山梨県）方面に拡がる護摩檀家の在住圏が明らかとなる、文化六年付の「江戸田舎日護摩講中元帳」にずらりと並ぶ人、人、人の名前は、秀神の尽力による信徒獲得の様相を象徴的に表している。

一九世秀観の履歴

秀神の遷化を受け、翌文政二年正月付で、薬王院門末寺院一同は後住を弟子の秀観とすることを熟談・合意した旨の一札が作成されている（写真）。寛政元年（二七八九）の「出家人別帳」は薬王院及び門末寺院の住僧の一覧であるが、梶田村真福寺（八王子市狭間町）の「看主」として「秀観」の名がある。「当西二十

歳」とあるので、この僧侶が後の高尾山一九世秀観と同一人物とすれば、晋山の文政二年には数え五〇歳ということになる。当時としては、すでに晩年とも言える年頃である。秀観の選任にあたっては「事教」ともに相応の

人体にござせうろう」と理由が付されているが、秀観は長谷寺（奈良県）に修学の経歴を持つていた。新義真言宗の教相本寺には長谷寺（豊山）と智積院（智山・京都府）があり、通常はどちらかの配下に属したが、薬王



秀観を推挙する門末寺院による一札（法政大学多摩図書館寄託）

思わぬ継承難航

薬王院文書には、秀観の山主就任に際して発生した諸費用を記した帳簿が残り、その間の一連の動向がわかるので注目してみよう。その内容は、江戸触頭に対する住持継承の手続きと、近隣や門末寺院が所在する地域への就任披露となる。

文政二年の正月早々、秀観は末寺惣代の大光寺らとともに江戸へ出府した。まず一四日に大光寺が門末一同による秀観推挙の願い書を提出すべく愛宕（東京都港区）の真福寺に

出頭したところ、役僧不在ゆえ翌日出直すように申し付けられる。出だしからつまずくが、この後も役僧他出を理由に願いはなかなか受理されなかった。その理由は、秀神遷化の際の届けが未提出だったことと、秀神代の本山上納金に未納分があるというところだった。結局、上納金の納付と、折から勸化に訪れていた長谷寺月輪院への勸奨金納付を確約する一札と引き換えに、二〇日になってようやく住持継承を承認された。真福寺側が態度を硬化させた理由として秀観は、「死去の届けいたさず拙僧上京」を推測しているが、住持死去という危急の折の上京となると、これは院室を兼帯する大覚寺との関わりであろう。薬王院が新義派（智山・豊山）の本末とは異なるルート、つまり大覚寺塔頭の院主として寺格を上昇させていた点は、新義派の触頭寺院にとつて面白いことではなかった

ろう。

門末圏への廻勤

晴れて一九世山主となつた秀観は、行列を仕立てて帰山の途に就く。帳簿には伴揃えの位置関係まで詳細な記録がある。先頭の一对になつた「箱」とは、棒の先に箱を片掛けに肩で担ぐ挟箱のこと。次に徒士が三名横隊に並び、六人が担ぐ山主の駕籠の左右を袴姿の侍が固め、駕籠の後ろに伴僧二名。さらに長柄持と草履取が各一名。「先例は長刀持たせせうろうところ、この度はこれを略す」とあるので、「長柄」は六尺棒か、あるいは傘だったか。「跡箱」は後ろ側の箱の意味か。そして、合羽籠が四荷。最後尾には「押」という警戒要員が付いた。伴僧の内一名は恐らく先の大光寺だろう。合羽籠は道々の宿人足を頼んでいるが、他の伴揃えは相應の装束なども求められたであろうから、周旋業者に手配を依頼している。

新たに就任した高尾山主が甲州道中を通行して帰山するとすると、格式相應の行列が求められたのである。府中宿で一泊の後、八王子宿では本陣の新野与五右衛門方等にて出迎えるの面々に山主就任を披露しており、酒食を振舞っている。帳簿には続いて「近郷廻村」の記述がある。甲州道中小名路宿（八王子市西浅川町）の末寺金南寺を旅宿としているので、八王子宿からのつづきで周辺地区を巡つたか。伴揃えは近隣村の者に交代している。

日を改めて相模北部の末寺圏（神奈川県相模原市域）にも出向いている。相模には八ヶ寺の門末寺院があり、高尾山最寄り村々と同様、重要な区域だった。本来、所在村ごとに巡回するところ、寺によつては無住や兼帯による繁忙、建築工事中などの諸事情があり、この度は「お忍びにて」とあるが、極力控え目に

高座郡相原村（相模原市緑区）花蔵院に各村の村役人・檀頭のみを集める形とするよう要望が出ていた。日取りも当日早朝に参列者へ通知する手筈が取られるなど、大勢の人々が集まるとは経費もかさみ、混乱を来す恐れもあつたのだろう。

註1 看住とも表記される。住職の地位にはないが、職務を代行する者として留守居とは区別する見解がある。田中洋平「近世武蔵国における新義真言宗寺院の無住化」(淑徳大学人文学部研究論集「二、二〇一七」)

註2 「事相」は儀式の作法に係ること、「教相」は教義に係ること。

註3 寺社奉行の配下として寺社行政を司る愛宕真福寺ほか三ヶ寺のこと。「御触」を発する立場なので「触頭」と称される。

おことわり 本連載では史料の引用について、適宜、読みやすく原文に手を加えています。

作品の右側にふんわりと咲いているのは「ランキユラス」というお花です。春の訪れを告げる花のひとつで、今回使用したのは「ラックス」種という、まるでワックスをかけたような、艶のある花びらが魅力的です。

この作品では、そんなランキユラスの柔らかな雰囲気を生かしながら、左側には大きく伸びる柳を合わせました。柳のしなやかな枝の動きが、春の訪れを感じさせる風のような空間を生み出して



花材：ランキユラス・ラックス、シダレヤナギ、オクロレウカ

いけばなの心⑤9

華道教授 佐藤 宗明

今月ご紹介する作品は、冬から春への移り変わりを感ぜさせる一作です。寒さが厳しい日もありますが、少しずつ陽射しがやわらかくなり、春の気配を感じるこの時期にぴったりの花を使いました。

いま。そして、それぞれの花材をつなぐ役割として、オクロレウカをあしらひ、ランキユラスの温かみと柳の爽やかさをうまく調和させました。今回の生け方は「生花新風体」という花形です。この花形は、みせたい花

材を際立たせるのに非常に効果的で、シンプルながらも花の持つ美しさや個性を最大限に引き出せます。特に、ランキユラスの春らしい優しさど華やかさを際立たせるには最適な生け方でした。

冬の寒さの中にも、確実に近づいている春の足音。そんな季節の変わり目の空気感を、この作品を通して少しでも感じていただけたら嬉しいです。

高尾山の昆虫

ツヤスジコガネ

184



高尾山で出会う昆虫は多岐に亘り、以前は常連がいればよく見かけたのに最近はずっかりご無沙汰な種、逆に最近になって見るようになった新顔と様々です。そんな中で私にとつて一期一会になっているのが、ツヤスジコガネです。

コガネ目シ科のMimela属の種で、光沢のある美しい種が多い本属の中でもその名のように強い光沢があり異彩を放つコガネ目シです。夏季の灯火にはいろいろな昆虫が集まり、コガネ目シの仲間も少なくありません。

Mimela属のコガネの中ではヒメスジコガネは多く、近似種のタケムラスジコガネも時折見られますが、ツヤスジコガネは珍客に該当します。緑がかかる他種と比べ、本種は変異があるものの黄褐色が表われ、全体に蛍光色を帯びるのが特徴で、前胸は一对の陥没があり、エクボのよう可愛らしいです。

どこの産地でもあまり多くない種で、高尾山でも同じ日に灯火で見つけた二頭だけでそれもかなり前の記録です。

灯火がLEDに換わり、より出会う機会は難しくなりましたが、一期一会でなく劇的な再会を密かに楽しみにしています。

(標本小畑 裕 撮影・文松島 孝)

中興開山六百五十年記念

特別御朱印授与の御案内



本年は中興開山の祖である俊源大徳が高尾山を再興された永和年間より数えて、六百五十年という大きな節目に当たります。この勝縁を記念して御護摩受付所において「特別御朱印」を授与致します。

この御朱印は御本尊飯縄大権現様と、高尾山を中興された俊源大徳をモチーフとした、力強い切絵が施されており、御来山の折にぜひお求め下さい。

特別御朱印

授与期間	年内予定
授与所	御護摩受付所
授与額	2,000円

大北斗供養(星まつり)

十二月二十日～二十一日

昨年の十二月二十日から二十一日にかけて、大北斗供養(星まつり)を厳修致しました。

人々の運勢は、定められた「星」の運行によって左右されるとされています。皆様に巡り来る九星に祈りを捧げ、災厄を除き福運を招く祈禱です。星まつりは旧暦の元旦や、立春、冬至などに行われており、高尾山では冬至前日の夕方に開白し、冬至の朝に結願を迎えます。

佐藤貫首導師のもと、山内僧侶総出にて、御信徒皆様の除災開運を祈願すると共に、御信徒各位の諸願成就を一心に御祈念致しました。



観音菩薩の宗教

86

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

如意輪観音（その24）

これまで三回に亙って親鸞の生涯に決定的な意味を有した三つの夢を論じてきた（「観音菩薩の宗教」⑧⑨⑩）。三つの夢とは、聖徳太子、如意輪観音、救世観音が親鸞に述べた夢告、すなわち夢のお告げである。親鸞が夢告を受けた場所は、順を追って河内国磯長の聖徳太子廟、比叡山の無動寺、京都の六角堂であった。これらのうち六角堂の夢告は、親鸞が比叡山を離れ、法然のもとに行く契機となっただけに最も重要と捉えてよい。そこで本稿では六角堂とこの本尊の如意輪観音菩薩について、さらに掘り下げて考察してみたい。

以下に資料を示して再考する。「六角堂縁起」は独立した文献としては伝わらないが、鎌倉初期の弁豪が筆写した『諸寺縁起集』（建永二年「二二〇七」）所収「六角堂縁起」によって知ることが出来る（藤井由紀子『聖徳太子の伝承―イメージの再生と信仰』吉川弘文館、一九九九年、九四〜九五頁）。そこには六角堂と聖徳太子、如意輪観音との深い結びつきが述べられている。以下、少々長いがその原文を引用し、拙訳と解説を試みる。なお、藤井のルビは新仮名であるが、ここでは本文に合わせ旧仮名であらためた。

「山背国平景（京力）愛宕郡の六角堂の如意輪観音は、淡路国の巖屋の海に、小さき韓櫃に入りて鎖を差しながら、打ち寄せらるる也。而して聖徳太子取り開きて之を見しところ、即ち如意輪観音也。持仏と為す。太子守屋と合戦の間、誓願して云く、戦に若し勝ち畢ば、四天王を造立し奉るべしと。我れ其の利有りて、思ふが如く勝ち畢らんと。四天王寺を建立せむと欲して、材木を山城国の愛宕山の壘において採らんとす。本尊を多良の樹の樾に居し奉りて浴水し、浴水畢りて本の如く本尊を取らんとするに、全く樹の樾を敬（放



現在の頂法寺六角堂の本尊。銅造如意輪観音坐像。像高7.1cm。鎌倉時代後期。

力）れず。祈請し給ふに夢に云く、吾れは汝の本尊と為りて既に七世を経て、今は此処において、蠢（蠢力）々たる衆生を利益すべきなりと。即ち御堂を建立せんと欲して、此の所において経始せんとする処に、東より一の老嫗出で来れば、太子、件の老嫗に問ひて云く、此の地に小堂を建立せんとおもふに、材木不日に採得する事如何と。即ち答へて云く、此の傍に禿なる相の樹一本有り。毎朝紫雲此の樹に下降すと。翌の日の早旦、件の樹下に向ひ給ひて之を見るに、果して老嫗の言の如し。

即ち之を見て切り臥し、件の樹一本を以て、六角堂一字を建立し奉る」
 続いて現代語訳を示す。「山城国の平景の愛宕郡にある六角堂の如意輪観音は、淡路の国の巖谷の海において小さな（衣服を入れる）四角の箱である）韓櫃に入つて鎖を繋ぎながら打ち寄せられたものである。聖徳太子は（それを）取つて開いてこれを見たところ、如意輪観音であった。（聖徳太子はこれを身に付けて守り本尊とする）持仏にした。（聖徳）太子は（排仏派の物部）守屋との合戦のさいに（四天王に）誓

願して『もし戦に勝ったならば、四天王（の像を）お造り申し上げよう。（結局、）私のほうが有利になって、思ったとおりに勝ちました』（聖徳太子は）四天王寺を建立しようとして、材木を山城の国の愛宕山のふもとで採ろうとした。（その際、持仏の如意輪観音たる）本尊をタラノキの木陰に置き申し上げ沐浴し、沐浴が終わつてもこのように本尊を取ろうとすると、（その本尊は）まったく置いた場所の木陰から離れなかった。（聖徳太子が本尊に）お祈りなされると、（その本尊が夢に出て）『私は七代前からあなたを利益しなさい』と（おっしゃった）。かくて御堂を建立しようとして、この場所ので工事を始めようとしたところ、ひとりの老婆が来ていたので、太子はその老婆に言った。『この地に小さなお堂を建立しよう』と思ひ、近いうちに

材木を採ろうと（思つて）いるのですが、その事はどのように（したらよい）でしょうか。（それに対し老婆が）答えて言うには、『この近くに禿げた相の木が一本ある。毎朝、紫色の雲がこの木に降りてくる』と。その翌日の朝早く（聖徳太子が）その木の下にお向かいになつてそれを見ると、果たして老婆が言った通りであつた。よつてこれを見て切り倒し、その木一本で六角堂（という）ひとつのお堂を建立なさつた」

以上を要約すると、聖徳太子は淡路の海に打ち守つた四天王のため、四天王寺を建てようとする、如意輪観音がその場から離れなくなり、本尊からそこが衆生を利益する場所だと告げられる。さらに老婆が来て相葉に従い相を切り倒して

六角堂を建立した。この縁起が史実を伝えるとすれば、六角堂は聖徳太子が物部守屋と仏教導入を巡つて戦つた丁末の乱の直後ということになる。『日本書紀』によれば、丁末の乱は用明天皇二年（五八七）に起きているから、六角堂創建は飛鳥時代に求められる。しかしながら六角堂創建については正史にも見えず、「六角堂縁起」が平安中期まで記録に現れないため、太子創建を史実と見ることはできない（藤井前掲書、九六頁）。藤井由紀子の研究によれば、六角堂の創建について「正確なことは不明」であり、その理由は六角堂が「私寺として創建され」、「霊験所としてしだいに貴族たちの崇敬を集めるようになった」からとされる。そのうえで、藤原実資の『小右記』などに基つき、「平安時代中ごろには著名な霊場として発展し、貴族たちの信仰を相当に集めていた」と結

論づけている（同書、九八〜九九頁）。飛鳥時代の創建が史実でないとしても、上記「縁起」は六角堂にまつわる重要な信仰を伝えている。すなわち六角堂創建が聖徳太子に帰せられていくこと、また如意輪観音に導かれ建立されたことである。こうした平安期には成立していたであろう伝承や信仰を踏まえて、親鸞が六角堂に参籠したことはまちがいない。それでは、如意輪観音と伝えられる六角堂の本尊はいかなる像容であつたのだろうか。上記「六角堂縁起」の文章を、太子の念持仏を祀るために六角堂を建立したと捉えれば、創建当時の六角堂本尊は如意輪観音といふことになる。ただし、その像容については述べるところがない。六角堂で親鸞に夢告をしたのは、資料によつて救世観音とするものと、聖徳太子とするものがあり、「観音菩薩の宗教」⑧、「親鸞

聖人傳絵」では蓮華座に坐した二臂の観音像が描かれている。しかしその観音像は親鸞の夢に現れた観音菩薩であつて、六角堂の本尊である可能性も、別の観音菩薩の可能性もある。現在の六角堂の本尊は鎌倉後期に造られたとされる六臂の銅造如意輪観音であり（井上一稔『如意輪観音像・馬頭観音像』日本の美術5、至文堂、一九九二年、四四〜四五頁）、創建当初の像とは限らない。藤井由紀子によれば、天台系の図像集である『阿婆縛抄』（仁治三年「二二四二」〜弘安四年「二二八二」）巻九十二「如意輪部」の「已上二臂像」の項に「六角堂は日本最初の伽藍也。聖徳太子七生の御本尊也。尤も仰崇すべし。件の像は蓮を持し、施願印也。石山像は之に同じと云々」とある（同書、一〇二頁）。では石山寺の如意輪観音像はいかなる像容であつたか。それは次回に見てみよう。

高尾山 季節散歩

和風月名
雪消月
「ゆきげづき」

「雪の果ては涅槃」という言葉にありますが、旧暦の涅槃会（二月十五日）の頃に降る雪が、その冬最後の雪になるとされてきました。現在でもこの時期を境に寒さの峠を越え、春一番が吹くようになります。

今月の風物詩
祈年祭

年の初めに五穀豊穡と国家の安泰を願って行われるお祭りです。現在は各地で二月十七日に行われています。また、その年の収穫に感謝して新穀を神様にお供えし、来年の豊穡を願って十一月二十三日に行われる新嘗祭と対をなしております。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、今では約五万人の方々に参加されており、期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみ下さい。また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますと、健康登山者限定の記念品と交換できます。



帳面……七百円
スタンプ……百円

健康登山者投稿作品
季節の絵手紙

「学びの花」

学びを続ける人は



花が咲く

「笑門来福」

八王子市 峰尾里枝子



一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

三十七段 咲きたる花は美しく 人生苦勞耐え忍ぶ

「苦勞」とは物事が上手く行くように、あれこれと気を使い行動することです。たくさんの花を一斉に美しく咲かせようとすると大きな苦勞に出会ってしまうことでしょう。そんな時に苦勞に耐えて抜いて、花のある人生を送りましょう。

おはなし散歩道 フェンスの向こうがわ

町田市 大澤桃代

亜希は急いで朝ごはんを食べました。「うちさまでー」と箸を置くと、おばあちゃんが目を見ました。二月の朝、この冬で一番の寒さです。あたりにはモヤが広がっています。川向うの牧場のサイロの屋根が、ぼんやり赤く見えています。

亜希は庭を通り抜け、モヤのかかった畑を走ります。ぼつぱたに風が当たって、ピリピリします。菜花を収穫していた両親とおじいちゃんが、あきれ顔で見えています。亜希は小学校二年生。家は農家で野菜を作っています。今は葉物ですが、春からレタスを作ります。畑は学校の校庭くらいの広さです。「今朝はやけに早いなあ」「約束があるんですって」

両親の音が聞こえます。「川に出たらいけない！」「わかってる！」「お父さんが叫びます。と、亜希も叫びます。川は畑の先です。流れはなだらかですが、大雨や雪解けの後には水がにごって怖い川になります。なので、川の周りはフェンスで囲まれています。「急がないと！」

亜希の足がはやくなりました。かけっこは得意です。モヤはどんどん広がってゆきます。両親とおじいちゃんの姿が見えなくなりました。牧場のサイロはぼんやりして、色がわかりません。目の前はまっ白です。そばにある葉っぱの緑とあぜ道の茶色がわかるだけです。亜希はわくわくしています。きつとうまくいきます。こんなにモ

ヤが濃いのですから。畑を抜けると、足元でザクザクと霜柱の音がしました。フェンスは見えます。それでも、亜希はまっすぐにフェンスに向かいます。幼いころから来ている道ですから、それくらいわかります。川の音が大きくなり、亜希は立ち止まり、手を伸ばします。手のひらにフェンスがあります。亜希は、大きな声で叫びます。「おはよう日葵ちゃん！」すると、遠くの方から「おはよう亜希ちゃん！」と、小さな声が返ってきました。そして、牧場の斜面を下りるザクザクという音がしました。モヤのため姿は見えませんが、川から上がってきて、あたりはまっ白です。「おはよう、やり直すよ！」と、日葵ちゃんが川の向こうから言います。「亜希ちゃん！ おはよう。」

亜希ちゃんの声が大き

く聞こえます。「日葵ちゃんおはよう！」と、亜希も言います。「おはよう」「おはよう」二人で、言っては返します。こだまみたいに。「じゃあ、橋のところだね」どちらからともなく言って、二人フェンスから離れた。これから学校へ行くのです。亜希はランドセルを背負って橋へ向かいます。入学してから、亜希は一人で学校へ行っていました。近くに友だちがいなかったのです。三学期になって、川向うの牧場に日葵ちゃん一家がやって来ました。フェンス越しに話をしたのは、日葵ちゃん。来た日です。女の子の姿を見かけたので、川向うへ声をかけました。「遊ば



う！」と。女の子はすぐに「うん」と返事をしました。同じ二年生でした。白いモヤの中で「おはよう」が言いたい、きのう日葵ちゃんが言いました。「姿が見えない方が面白いね」と。亜希もすぐに賛成しました。日葵ちゃんは町から来たのでモヤが珍しかったのです。亜希が橋へ走ってゆくと、日葵はもう待っていました。二人はまた「おはよう」と言い合いました。(完)

(挿し絵・小出 茂)

恩師・菊地正先生に学ぶ(9) 創作書おろし「八王子空襲擬人化物語」 エントツ君の嘆きその一

八王子市 石井忠明

とんとんむかし…とは言ってもつい最近まで続いた話じやよ。それはな、八王子がまだ神奈川県南多摩郡だった頃から始まる話じやよ。

八王子市内の八日町に明治二十年(二八八七)に創業した「元木屋」という饅頭などの和菓子を作って売る店があつてな、その店に二十三メートルもの高く聳え立つ煙突があつたと。その「エントツ君」が嘆き悲しんだ物語じやよ。

お店の始まりはな、リヤカーに屋台を作つて引き歩き、「出来立ての饅頭は如何かねえ!温かいお汁粉もあるよ!」と商いに精を出していたそうじや。時にはな、駄汁粉屋(粗末な汁粉を売る店)と後ろ指を指されたこともあつてな、その苦

労も徐々に実つて和菓子屋は繁盛、近郷近在に知られるようになった。それというのにも近くに立派なお寺があつて、そのお寺にはな、女流俳人松原庵屋布(二七三二、一八二五)、教育者の奥津雁江(二八四二、一九二八)の墓があるんだと。また

明治三十年(二八九七)の八王子大火の犠牲者供養碑が安置されており、それらの史跡を参拝する人達が増え、その行き帰り元木屋に寄るようになってな、お店は益々繁盛していったと。

そんな中で日本はな、日清日露の勝戦から富国強兵の風が更に強くなり、大正三年(一九一四)に始まった第一次世界大戦に参戦し、突き進んでしまったのじや。「エントツ君」の煙突が造られた

のはその頃じやよ。

煙突が完成してから十年もたたぬ大正十二年(一九二三)の九月一日、午前十一時五十八分に起きたマグニチュード七・九という大地震、各地に未曾有の被害を齎した関東大震災が八王子を襲い、死者行方不明者合わせて二十余名、家屋や神社仏閣も多数倒壊し、大きな被害を受けたのじやよ。でもな、エントツ君だけは何と凛として立っていたと。

そして第一次世界大戦で水膨れした日本経済は、贅肉を落とすしきれぬうちに関東大震災で足元を揺さぶられ、ヨタヨタしながら戦乱の昭和時代を迎えたのじやよ。

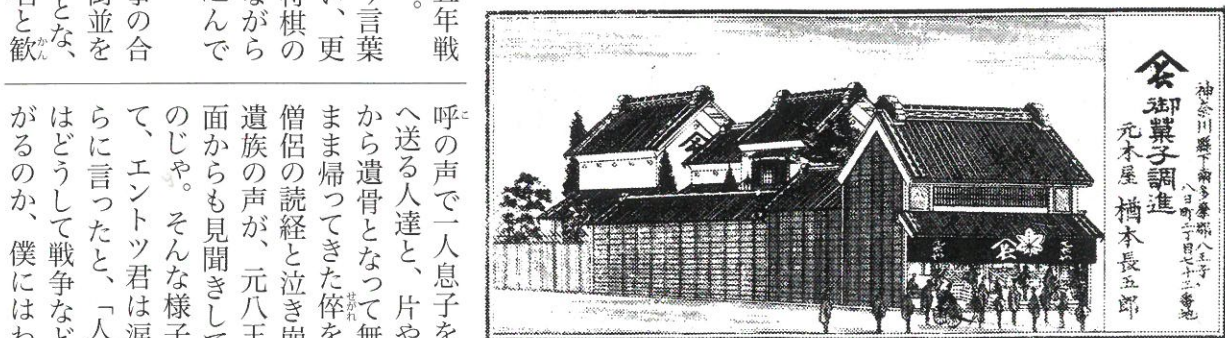
まず昭和六年(一九三二)に奉天(現・瀋陽)郊外の柳条湖で起きた線路の爆破事件を契機として、現地に駐屯していた日本軍が侵攻して中国東北部(満州)を占領下に置いた満州事変が起きたのじやよ。

国内でも昭和

十一年(一九三六)二月二十六日、陸軍の皇道派青年将校を中心とした一派が国家改造・統制派打倒を目標として約一千五百名が蜂起し、首相官邸などを襲撃した二・二六事があったのじや。

そして昭和十二年(一九三七)七月七日に起きた盧溝橋事件により全面的に中国侵略を開始して事実上の戦争状態に入り、満州事変から敗戦まで、いわゆる十五年戦争に突入したのじや。

日本は戦争という言葉をも玩具のように使い、更に人間の尊い命を将棋の駒の様に使い捨てながら暗い穴倉へ突き進んで行つたのじやよ。



明治二十年頃八日町元木屋「八王子和菓子組合のあゆみ」より

呼の声で一人息子を戦地へ送る人達と、片や戦地から遺骨となつて無言のまま帰ってきた倅を弔う僧侶の読経と泣き崩れる遺族の声が、元八王子方面からも見聞きしていたのじや。そんな様子を見て、エントツ君は涙ながらに言つたと、「人間様はどうして戦争などしたがるのか、僕にはわから

高尾山仏舎利塔 結縁牌懸仏のおすすめ

高尾山にはタイ王国・王室より授けられた、大聖釈尊の真身骨を奉安している仏舎利塔があります。そしてその周りを囲むように建立された百観音お砂踏霊場がございます。

御信徒各位には、釈尊との御勝縁を結ばれますよう、仏舎利塔内に結縁牌懸仏(かけぼとけ)をご納仏されることをお勧め申し上げます。

この結縁牌懸仏は、夫々のご家族の先祖代々供養の為に、あるいは講中、参拝団の物故者慰霊の為に、お釈迦様と御信徒の皆様との尊いご結縁のしるしとして、霊名あるいは施主のご芳名を刻み、仏舎利塔内壁面に奉安し、大聖釈尊の聖骨と共に幾久しく供養されるものであります。

御納仏冥加料 一体 拾万円也



尚、お申し込みの方には「御納仏回向之証」をお授け致します。(左の写真)



ない」

そして遂に日本は昭和十六(一九四二)年十二月八日、ハワイの真珠湾(パールハーバー)を奇襲し、第二次世界大戦(太平洋戦争)の泥沼に足を踏み入れて行つたということじや。

初めは日本軍が優勢であつたがそれも東の間、昭和十七年(一九四三)のミッドウエー海戦での敗北から、ガダルカナル島、サイパン島、硫黄島を奪還されたのじや。

昭和二十年(一九四五)三月十日にはアメリカ軍のB29爆撃機三百四十四機による空襲が行われ、東京の下町を中心に七十万発の焼夷弾による無差別攻撃を受けたのじや。この惨い攻撃で十万人余りが犠牲となり、負傷者は数えきれない程じやつた。その後も沖繩での悲惨な地上戦や各地の小都市に無差別爆撃が繰り返されたのじやよ。八王子も無差別の空襲に見舞われたのじや。

昭和二十年八月二日午前零時、B29爆撃機百七十機が飛来、焼夷弾を合わせて六十七万発二千発を投下、東京大空襲にも匹敵する焼夷弾が投下されて、文字通り焼け野原じやつた。

特に八日町の十字路付近や追分付近の道端には直撃を受けて即死した人や息も絶え絶えな人が折り重なつていたといういうことじや。

近くのお寺の境内には焼け焦げ足した遺体が二百五十体近く集められてな、ゲートルを巻いた片方の足が無くなつたり、内臓が見えたりいるような惨い有様で、奥さんであろうか「父ちゃん、父ちゃん、どうしてこんな姿に」と縋りつく人もじやつたと。

八王子空襲の死者は四百五十人から五百人とみられ、負傷者は二千人から二千五百人、罹災者七千七百人以上が被害に遭つたと。

(続く)



祈大願成就 身体健全

高尾 登



高尾山火渡り祭

(令和七年三月九日 日曜日)

柴燈大護摩供御壇木特別志納御案内

當山では毎年三月第二日曜日に春を招く恒例行事として、祈祷殿火渡り本尊
 ご寶前にて、高尾山修験道による火渡り祭が盛大に執り行われます。
 火渡り祭とは、當山貫首大導師のもと、全国各地の靈山で修行を重ねた山伏が、
 一心に諸願成就の祈りを捧げる、関東屈指の大祈禱法要であります。
 この浄行にあたり、御信徒の皆様方より柴燈大護摩供にて供される、御本尊・
 飯縄大権現様の功德を顕す御壇木のご志納を一本二万円にて募っております。
 ご信徒の皆様、並びにご講中の講員様方におかれましては、高尾山の浄行に大い
 なるご信託を賜りますよう、謹んでお願いを申し上げます。
 尚、ご志納の証として、ご芳名を薬王院参道に一年間掲示致します。御志納方法
 についての詳細は、高尾山薬王院信徒部までお問い合わせ下さい。

電話 ○四二六六・二二五
 FAX ○四二六六・二九九
 大本山 高尾山薬王院 信徒部

柴燈大護摩供火生三昧
高尾山火渡り祭 開催のお知らせ

三月九日(日)午後一時より 於・山麓祈祷殿大広場

高尾山中興開山六百五十年記念



火渡り祭「なで木」の功德

「なで木」とは御本尊様の
 大慈大悲の御手でござ
 います。
 年齢・氏名を御記入の
 上、健康な方は益々
 壮健であるように、お身
 体に病の生じている方は、
 御本尊様を念じながら
 「なで木」でその患部を
 撫でさすり下さい。
 高尾山火渡り祭におい
 て、柴燈大護摩供の護
 摩木として山伏により、



なで木料 一座二百円

火中に供されることで、
 身体健全・息災延命を
 祈念して御本尊様より
 お加持を賜り、病魔を
 滅する御加護をいただき
 ます。

蛇 瀧 (2)

青龍権源蛇瀧神

許多美麗瀧行人

三十多年非來訪

深敬龍神不愛人

厚木市 荒井 一雄
 為せば成る
 為さねば成らぬ何事も
 成らぬは人の為さぬなりけり
 (上杉鷹山)

蛇 滝 (2)

清龍大権現様は蛇滝の神様：
 三十数年振りに訪れるも
 相変はず幾多の
 若々しき美人・麗人が
 熱心に滝行をしている…

龍神様を深く敬愛する余り
 人間と恋愛する事を
 忘れたるかの如くに…



お知らせ

高尾山では、御壇木御志納の申し込みを、お電話・
 ファックス等で受付けております。
 高尾山報の二月号に同封いたしました、郵便振替
 「払込取扱票」を利用してでもお申し込み頂けます
 で、よろしくお願ひ申し上げます。
 「払込取扱票」でお申し込みを頂く際に、願意
 (お願ひ事)が未記入でご連絡がつかない場合、「身体
 健全」とさせて頂きます。
 尚、「払込取扱票」は、高尾山報助成金の振替にも
 ご利用いただけます。

高尾山報助成金志納者御芳名(順不同・敬称略)

八王子市	鉾田市	鹿沼市	鈿子市	八王子市	八王子市	八王子市	さいたま市	八王子市	中野区	伊勢崎市	本庄市	加須市	横須市	川崎市	八王子市	立川市	板橋区	邑楽郡	八王子市	練馬区	前橋市	富里市	三鷹市	前橋市	邑楽郡	北本市	所沢市	比企郡			
宇佐美	観行	石川	坂本	小池	中田	櫻田	須賀	須賀	鈴木	田島	山田	稲見	大江	福島	土井	土田	中山	宇津木	小宮	神山	青木	森	岡野	野口	柳田	清水	神元	小本曾	島田		
紀子	謙一	安子	まり子	律子	義弘	卓雄	廣子	充	建装	栄夫	ツヤ子	泰子	敏夫	俊彦	孝	寛生	義明	昇	静子	茂雄	照森	大治	道雄	稔子	武	誠	五子	昌子			
町田市	草加市	八王子市	松戸市	八王子市	中野区	世田谷区	邑楽郡	八王子市	鴻巣市	三鷹市	専ルブス市	相模原市	熊谷市	新宿区	前橋市	八王子市	小金井市	八王子市	足立区	東大和市	小平市	佐野市	横須市	武蔵野市	川崎市	八王子市	新座市	行田市	府中市		
坂口	峯尾	青木	榎本	八王子市	塚田	坂本	坂本	鈴木	杉山	長田	三枝	柴崎	持田	大橋	小林	小浦	船江	串田	中山	中川	関	峰	江波戸	峯尾	川村	水越	柿沼	野口	藤田		
安宏	好生	保	光	昭然	真也	俊明	良子	邦司	吉雄	秀武	ヒロ子	光生	輝子	絢子	泰晴	栄次	展子	恵司	彰久	道雄	シマ	克子	敏和	晴夫	初夫	孝行	琢磨	健一	粧麗		
御殿場市	八王子市	所沢市	ふじみ野市	佐野市	八王子市	足立区	新潟市	市原市	八王子市	北本市	深谷市	新潟市	町田市	八王子市	葛飾区	八王子市	入間市	八王子市	原	高野	今井	佐々木	水島	鹿野	石田	真下	野嶋	関根	佐藤		
芦澤	石田	土屋	山田	荒居	安齊	高澤	小川	金子	兒井	栗原	齊藤	中澤	早川	皆方	齋藤	濱口	田中	北原	佐藤	原	高野	今井	水島	鹿野	石田	真下	野嶋	関根	佐藤		
宗一郎	貞夫	信男	輝雄	幸子	宣隆	忠	憲子	敦子	キミ子	悦子	裕一	雄博	正雄	大明	実	秀和	和男	光	武	義宣	晴子	晋介	義信	ツネ子	博司	桜佳	俊雄	和之	三善	亮	
高崎市	坂戸市	江戸川区	京都市	八王子市	川越市	鴻巣市	我孫子市	秩父郡	八王子市	深谷市	秩父郡	八王子市	豊田市	桐生市	相模原市	鴻巣市	千葉市	八王子市	熊谷市	さいたま市	八王子市	藤岡市	立川市	八王子市	入間市	八王子市	三鷹市	日野市	八王子市		
小暮	加藤	長田	吉村	高野	山田	小宮	守屋	岩崎	大久保	木島	今井	新井	山中	高野	黒木	大島	海老原	村木	皆本	橋本	鬼頭	鈴木	吉田	木下	落合	青木	笠原	三鷹市	相原	町田	
典子	智美	康広	薫	真理子	友嗣	清直	しう	しう	子	富士夫	輝雄	茂二	裕貴	恵	きよ子	敏孝	廣美	佳計	房子	宗良	孝	菊治郎	義晴	忠	清子	心講	雄三	克彦	呈		
高尾山健康登山者一同	川崎市	八王子市	相模原市	町田市	伊勢崎市	八王子市	野田市	八王子市	野田市	八王子市	市原市	熊谷市	相模原市	八王子市	都留市	横須市	杉並区	昭島市	八王子市	吾妻郡	深谷市	川崎市	墨田区	八王子市	前橋市	中央区	熊谷市				
	三村	石井	野津	山内	内田	秋間	峰尾	福田	高橋	佐藤	高橋	藤田	本吉	高橋	見城	雨宮	大江	井出	千代子	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平		
	光二	征二	英夫	千エ	國一	薫	恒夫	静司	正久	榮二	妙子	武	義光	榮二	勇夫	宏	泰子	千代子	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	
	光二	征二	英夫	千エ	國一	薫	恒夫	静司	正久	榮二	妙子	武	義光	榮二	勇夫	宏	泰子	千代子	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平	喜平

御護摩修行のおすすめ

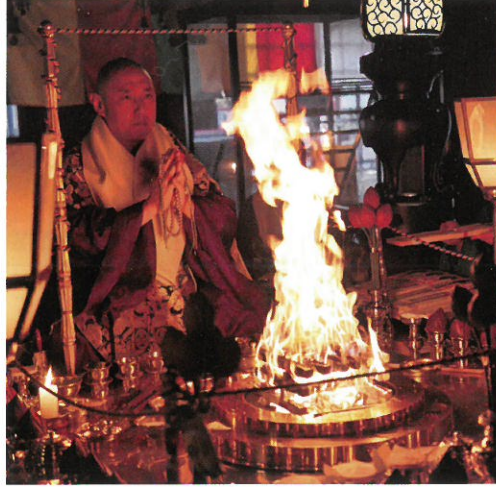
皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行をお勤めしております。

御護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩惱を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様が祈りが御本尊様に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、御供物と共に清浄な場所に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯繩大権現」とお唱え下さい。



御朱印とは本来、心願成就を祈り書き写した経文(般若心経・観音経等)を、御本尊様の宝前にお納めし、その祈願を込めた印として頂いたものです。

現在は神社仏閣への参拝の証として、御朱印を頂く場合が多いようです。

高尾山は霊山として、又、多摩新四国第六十八番、関東三十六不動尊第八番の霊場の札所としてもその名を知られており、季節限定の御朱印など、様々な用意しております。

尚、御朱印は御本尊様の御分身に当る宝印であります。大切に護持頂きまして、益々御本尊様のご利益に浴せられますよう心よりお祈り申し上げます。

御朱印のご案内

願成就を祈り書き写した経文(般若心経・観音経等)を、御本尊様の宝前にお納めし、その祈願を込めた印として頂いたものです。

現在は神社仏閣への参拝の証として、御朱印を頂く場合が多いようです。

高尾山は霊山として、又、多摩新四国第六十八番、関東三十六不動尊第八番の霊場の札所としてもその名を知られており、季節限定の御朱印など、様々な用意しております。

尚、御朱印は御本尊様の御分身に当る宝印であります。大切に護持頂きまして、益々御本尊様のご利益に浴せられますよう心よりお祈り申し上げます。

高尾山薬王院の御護摩札

 交通安全(ステッカー)(車内用札) 中5.5×長12.5cm	 御護摩札 最大巾8.0×長35.5cm	 御護摩札 最大巾8.5×長37.7cm	 御護摩札 最大巾9.5×長42.3cm	 特別大護摩 最大巾12.0×長48.5cm	 開帳大護摩 最大巾12.0×長54.5cm	 特別開帳大護摩 最大巾14.3×長60.5cm
--	---	---	---	---	---	---

(大) 10,000円	(中) 5,000円	(小) 3,000円	お護摩 3,000円以上	お護摩 5,000円以上	お護摩 10,000円以上	特別大護摩 30,000円以上	開帳大護摩 50,000円以上	特別開帳大護摩 100,000円以上
<p>()内の略体をお書き下さい</p> <p>お護摩の願事</p> <p>お願い事は一体一願意とより受け賜ります。</p> <p>但し、五千円で家内安全と前亮繁昌のみ併願とさせていただきます。</p> <p>お護摩札には年令・生年月日等は入りません。</p>								



登山だより

三月行事日程

一日〜七日

聖天秘供(聖天堂)

一日、十三日、二十五日

弁天秘供

四日(午前のみ)、二十五日

御詠歌勉強会

(十時不動院)

八日

仏舍利詣り(仏舍利塔)

九日

高尾山中興開山

六百五十年記念

高尾山火渡り祭

(午後一時)

山麓祈禱殿大広場

二十一日

飯繩様御縁日

神徳報謝百味飲食供

(九時大本堂)

二十二日

月例写経会

(十三時山麓不動院)

二十八日

奥之院開扉供養

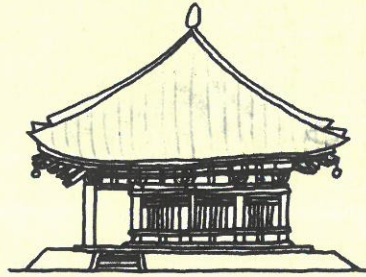
(十時奥之院)

三十日

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)



毎日の お護摩奉修時間

午前9時30分
〃 11時00分

午後0時30分
〃 2時00分
〃 3時30分

ご講中・団体等
御相談下さい。

神徳報謝百味飲食供 御志納のおすすめ

当山では、御本尊飯繩大権現様の日々の御加護に感謝するために、御縁日である二十一日に、沢山のお供物(百味)を捧げて、大般若経六百巻を転読し、供養申し上げる法要を執り行っております。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は問い合わせ下さい。

尚、法要終了後に大本堂にて百味供養の御札を授与致します。

また、当日参加できない方にはお札の郵送も受け付けております。

毎月二十一日 午前九時(於大本堂)
御志納金 一口 三千円以上



大般若経を守護する十六善神の図

高尾山報助成金 御志納のお願い

当山では、大護摩修行等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報をご送付しております。

引き続きご愛読して頂きますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。



下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます



高尾山薬王院ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 犬山秀康
編集人 菅井倫浩
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円